

英語の強勢について（その2）

On English Stress

田 中 章

次に（26）のànecdótalに向かうが、派生は（29）のようになる。

（29） ànecdótal

Line 0	Project:L	x	(x	(x	x	(x # Avoided
		L	H	H	H	Avoid (x(OR
	Edge:LLL	(x	(x	(x	x	Avoid (x(OR
		L	H	H	H	
	ICC:L	irrelevant				
	Head:L	x	x	x		
		(x	(x	(x	x	
		L	H	H	H	
Line 1	Edge:RRR	x	x	x)		
		(x	(x	(x	x	
		L	H	H	H	
	Head:R			x		
		x	x	x)		
		(x	(x	(x	x	
		L	H	H	H	

SD				x
	x			x)
	(x	x	(x	x
	L	H	H	H

この派生では、語頭から二番目と、語末から二番目の音節および語末の音節が重音節であるため、Project:Lが適用される。その際、回避制約（Avoid (x()は無視される（overridden）。また、語末の音節も重音節であるが、回避制約（Avoid (x #)のためProject:Lは適用されない。次に語頭の音節にもアクセントを付与するためにEdge:LLLが適用されるが、この際にも回避制約（Avoid (x()は無視される（overridden）。ICC:Lは適用されない。このようにして生成された3個の構成素の主要部を表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためにEdge:RRRとHead:Rが適用される。最後にSDが適用され、語頭から二番目の音節のline 1 上の星印が削除されて正しいアクセントが生成される。

次に(26)のvígílantを扱うが、派生は(30)のようになる。

(30) vígilant

Line 0	Project:L	x	x	x	(x # Avoided
		L	H	H	
	Edge:LLL	(x	x	x	
		L	L	H	
	ICC:L	cannot apply			(x(Avoided
	Head:L	x			
		(x	x	x	
		L	L	H	
Line 1	Edge:LLL	(x			
		(x	x	x	
		L	L	H	

Head:L	x		
	(x		
	(x	x	x
	L	L	H

この派生では、語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #)) のため Project:L は適用されない。次に語頭の音節にもアクセントを付与するために Edge:LLL が適用される。ICC:L は回避制約 (Avoid (x ()) のため適用できない。このようにして生成された 1 個の 3 項的構成素の主要部を表示するために Head:L が適用される。line 1 では line 0 で生成された主要部に主強勢を付与するために Edge:LLL と Head:L が適用されて正しいアクセントが生成される。

次に (26) の repúgnant に向かうが、派生は (31) のようになる。

(31) repúgnant

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x # Avoided
		L	H	H	

Edge:LLL	need not apply
----------	----------------

ICC:L	irrelevant
-------	------------

Head:L		x	
	x	(x	x
	L	H	H

Line 1	Edge:LLL		(x	
		x	(x	x
		L	H	H

Head:L		x	
		(x	
	x	(x	x
	L	H	H

この派生では、語頭から二番目の音節が重音節であるため、Project:L が適用される。また、語末

の音節も重音節であるが、回避制約（Avoid (x #)）のためProject:Lは適用されない。次に語頭の音節にはアクセントを付与する必要がないためEdge:LLLは適用されない。またICC:Lはirrelevantである。このようにして生成された1個の2項的構成素の主要部を表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された主要部を主強勢と表すためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。

次に (26) のcomplaisantを扱うが、派生は (32) のようになる。

(32) complaisant

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x # Avoided
		H	H	H	(x(Avoided
	Edge:LLL	need not apply			
	ICC:L	irrelevant			
	Head:L		x		
		x	(x	x	
		H	H	H	
Line 1	Edge:LLL		(x		
		x	(x	x	
		H	H	H	
	Head:L		x		
			(x		
		x	(x	x	
		H	H	H	

この派生では、すべての音節が重音節であるが、Project:Lは語の右端から適用されると仮定すると、二つの回避制約（Avoid (x(, Avoid (x #)）のため語頭から二番目の音節にしかProject:Lは適用されない。また、Edge:LLLは、語頭の音節にはアクセントが付与されないので適用する必要はない。ICC:Lはirrelevantである。このようにして生成された1個の2項的構成素を構成する二つの音節のうちのどちらが主要部であるかを示すためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された主要部を主強勢と表すためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。

次は (26) の *magnánimous* に向かうが、派生は (33) のようになる。

(33) *magnánimous*

Line 0	Project:L	(x	x	x	x	(x # Avoided
		H	L	L	H	
	Edge:LRL	(x	(x	x	x	Avoid (x(OR
		H	L	L	H	
	ICC:L	cannot apply				(x(Avoided
	Head:L	x	x			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
Line 1	Edge:RRR	x	x)			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
	Head:R		x			
		x	x)			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	

この派生では、語頭と語末の音節が重音節であるが、語末の音節は回避制約 (Avoid (x #) のため Project:L は適用されない。語頭の音節には Project:L が適用される。次に Edge:LLL が空虚に適用され、ICC:L が適用されるとすると、正しいアクセントは派生されない。従って語頭から二番目の音節にアクセントを付与するには、Edge:LRL を適用するしかない。この際、回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。また ICC:L は回避制約 (Avoid (x () のため適用できない。このようにして生成された 2 個の構成素を構成する音節のうち、どれが主要部であるかを表示するために Head:L が適用される。line 1 では line 0 で生成された 2 個の主要部のうち、どちらが主強勢となるかを示すために、Edge:RRR と Head:R が適用されて正しいアクセントが生成される。

mòmentous の派生は *complaisant* の派生 (32) と、*desírous* の派生は *repúgnant* の派生 (31) と全く同じになる。

次にHVの挙げている次のような例を扱う。

(34) (= HV, p. 230, (10))

sólid	absúrd	suprême
méllow	ròbúst	discréte
certain	diréct	ináne
astónish	usúrp	achieve
détérmine	tòrmént	cajóle
fóllow	cavórt	caróuse

まず、(34) のsólidを扱うが、派生は (35) のようになる。

(35) sólíd

Line 0	Project:L	x	x	(x # Avoided
		L	H	
	Edge:LLL	(x	x	
		L	H	
	ICC:L	irrelevant		
	Head:L	x		
		(x	x	
		L	H	
Line 1	Edge:LLL	(x		
		(x	x	
		L	H	
	Head:L	x		
		(x		
		(x	x	
		L	H	

この派生では、語末の音節が重音節であるが、語末の音節は回避制約 (Avoid (x #) のため Project:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントを付与するためにEdge:LLLが適用される。ICC:Lの適用はirrelevantである。このようにして生成された1個の構成素を構成する音節のうち、どれが主要部であるかを表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された主要部を主強勢であると表示するためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。

次は (34) のabsúrdに向かうが、派生は (36) のようになる。

(36) absurd

Line 0	Project:L	x	(x	Avoid (x # OR
		H	H	(x(Avoided
	Edge:LLL	need not apply		
	ICC:L	irrelevant		
	Head:L		x	
		x	(x	
		H	H	
Line 1	Edge:LLL		(x	
		x	x	
		H	H	
	Head:L		x	
			(x	
		x	x	
		H	H	

この派生では、語頭と語末の音節が重音節であるが、語末の音節にはアクセントが付与されるため回避制約 (Avoid (x #) は無視され (overridden)、Project:Lが適用される。また語頭の音節には回避制約 (Avoid (x() のためProject:Lは適用されない。またEdge:LLLは語頭の音節にアクセントがないため、適用される必要はない。またICC:Lの適用はirrelevantである。このようにして生成された1個の構成素の主要部を表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された主要部が主強勢であることを表示するために、Edge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。

(34) のsuprêmeの派生はabsúrd (36) の派生と、mélloowの派生はsólid (35) の派生と全く同じになる。ròbústの派生は (37) のようになる。

(37) ròbúst

Line 0	Project:L	(x	(x	Avoid (x # OR
		H	H	Avoid (x(OR

Edge:LLL	vacuous
----------	---------

ICC:L	irrelevant
-------	------------

Head:L	x	x
	(x	(x
	H	H

Line 1	Edge:RRR	x	x)
		(x	(x
		H	H

Head:R		x
	x	x)
	(x	(x
	H	H

この派生では、語頭と語末の音節が重音節であるが、語頭と語末の音節にはアクセントが付与されるため、二つの回避制約 (Avoid (x #, Avoid (x() は無視される (overridden)。Edge:LLLは空虚に適用される。またICC:Lの適用はirrelevantである。このようにして生成された2個の構成素の主要部を表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された2個の主要部のうちどちらが主強勢であるかを表するためにEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。

(34) のdiscréteの派生もabsúrdの派生 (36) と全く同じになる。また、certainの派生はsólidの派生 (35) と全く同じになる。

(34) のdiréctの派生は (38) のようになる。

(38) *diréct*

Line 0	Project:L	x	(x	Avoid(x # OR
		L	H	
	Edge:LLL	need not apply		
	ICC:L	irrelevant		
	Head:L		x	
		x	(x	
		L	H	
Line 1	Edge:LLL		(x	
		x	(x	
		L	H	
	Head:L		x	
			(x	
		x	(x	
		L	H	

この派生では、語末の音節が重音節であるが、アクセントが付与されるため、回避制約 (Avoid (x #)) は無視される (overridden)。Edge:LLLは、語頭の音節にはアクセントが付与されないので適用する必要はない。ICC:Lの適用はirrelevantである。このようにして生成された1個の構成素の主要部を表すためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された主要部を主強勢であると表示するためにEdge:LLLとHead:Lが適用されて正しいアクセントが生成される。この派生は*sólid*の派生 (35) と全く対称的になっている。また、*diréct*の語頭の音節が重音節の場合、*absúrd*の派生 (36) と全く同じになる。

*ináne*の派生も*diréct*の語頭が軽音節の場合の派生、すなわち (38) と全く同じになる。

次に動詞の派生に向かう。最初は、*astónish*であるが、派生は (39) のようになる。

(39) astónish

Line 0	Project:L	(x	x	x	(x # Avoided
		H	L	H	
	Edge:LRL	(x	(x	x	A:(x(OR
		H	L	H	
	ICC:L	vacuous			
	Head:L	x	x		
		(x	(x	x	
		H	L	H	
Line 1	Edge:RRR	x	x)		
		(x	(x	x	
		H	L	H	
	Head:R		x		
		x	x)		
		(x	(x	x	
		H	L	H	
	SD		x		
			x)		
		x	(x	x	
		H	L	H	

この派生では、語頭と語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #) のためProject:Lは語末の音節には適用されない。次に語頭から二番目の音節にアクセントが付与されるためEdge:LRLが適用される。ICC:Lは空虚に適用される。このようにして生成された2個の構成素の主要部を表示するためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された2個の主要部のどちらが主強勢を担うかを示すためにEdge:RRRとHead:Rが適用される。最後にSDが適用されて正しいアクセントが生成される。

次にusúrp、achíieve、cajóle、cavórtおよびcaróuseの派生は共にLHであるので、派生はLHのdirectの派生 (38) と全く同じになる。détermineの派生はLHHであるので、同じLHHであるrepúgnantの派生 (31) と全く同じになる。tòrméntの派生はHHであるから、同じHHであるròbústの派生 (37) と全

く同じになる。followはLHであるので派生はsolidの派生 (35) と全く同じになる。

次にHVの挙げている次のような例について考えることにする。⁸

(40) (= HV, p. 231, (13))

a. cèrebéllum	Kentúcky	Mississíppi
b. cèrebéllar	Kentúckian	Mississípian

最初に (40a) のcèrebéllumであるが、派生は (41) のようになる。

(41) cèrebéllum

Line 0	Project:L	x	x	x	x	(x # Avoided
		L	L	L	H	
	Edge:LLL	(x	x	x	x	
		L	L	L	H	
	ICC:L	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	
	Head:L	x		x		
		(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	
Line 1	Edge:RRR	x		x)		
		(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	
	Head:R			x		
		x		x)		
		(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	

この派生では、語末の音節が重音節であるが、語末の音節は回避制約 (Avoid (x #) のため Project:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントを付与するためにEdge:LLLが適用される。

次にICC:Lが適用され、2項的構成素が二つ生成される。このようにして生成された2個の構成素を構成する音節のうち、どちらが主要部であるかを表示するためにHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生成された2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すために、Edge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。

次にcèrebéllumと対をなす(40b)のcèrebéllarを扱うが、派生は(42)のようになる。

(42) cèrebéllar

Line 0	Project:L	x	x	x	x
		L	L	L	L
	Edge:LLL	(x	x	x	x
		L	L	L	L
	ICC:L	(x	x	(x	x
		L	L	L	L
	Head: L	x		x	
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L
Line 1	Edge:RRR	x		x)	
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L
	Head:R			x	
		x		x	x)
		(x	x	(x	x
		L	L	L	L

この派生では、cèrebéllumとは異なり、語末の音節も軽音節であるので、Project:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントを付与するためにEdge:LLLが適用される。次にICC:Lが適用され、2項的構成素が二つ生成される。このようにして生成された2個の構成素を構成する音節のうち、どちらが主要部であるかを表示するためにHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生成された2

個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すために、Edge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。

次に (40a) のKentuckyに向かうが、派生は (43) のようになる。

(43) Kentucky

Line 0	Project:L	(x	x	x	
		H	L	L	
	Edge:LRL	(x	(x	x	Avoid (x(OR
		H	L	L	
	ICC:L	vacuous			
	Head:L	x	x		
		(x	(x	x	
		H	L	L	
Line 1	Edge:RRR	x	x)		
		(x	(x	x	
		H	L	L	
	Head:R		x		
		x	x)		
		(x	(x	x	
		H	L	L	
	SD		x		
			x)		
		x	(x	x	
		H	L	L	

この派生では、語頭の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。次に語頭から二番目の音節にアクセントが付与されるためにEdge:LRLが適用される。ICC:Lは空虚に適用される。このようにして生成された2個の構成素の主要部を表すためにHead:Lが適用される。line 1 ではline 0 で生成された2

個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すために、Edge:RRRとHead:Rが適用される。最後に語頭の音節のライン1上の星印がSDにより削除されて正しいアクセントが生成される。なお、音節-enは共鳴音（sonorant）で終わっていると考え、SDではなく、共鳴音無強勢化（sonorant destressing）を適用する考え方もあるが、この規則の形に当てはまらないので、SDが適用されるとしておく。

次はKentúckyと対をなす（40b）のKentúckianに向かうが、派生は（44）のようになる。

（44）Kentúckian

Line 0	Project:L	(x	x	x	x	(x # Avoided
		H	L	L	H	
	Edge:LRL	(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
	ICC:L	cannot apply				(x(Avoided
	Head:L	x	x			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
Line 1	Edge:RRR	x	x)			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
	Head:R		x			
		x	x)			
		(x	(x	x	x	
		H	L	L	H	
	SD		x			
			x)			
		x	(x	x	x	
		H	L	L	H	

この派生はHLLHであるmàgnánimousの派生 (33) と一点を除いて同じである。それは語頭の音節が無強勢であるということである。従って、重複する説明は省くが、最後にSDが適用されて語頭の音節のライン 1 上の星印が削除されて正しいアクセントが派生される。

次は (40a) のMississíppiを扱うが、派生は同じLLLLであるcèrebéllarの派生 (42) と全く同じになる。またMississíppiと対をなす (40b) のMississíppianの派生は (45) のようになる。

(45) Mississíppian

Line 0	Project:L	x	x	x	x	x	(x # Avoided
		L	L	L	L	H	
	Edge:LLL	(x	x	x	x	x	
		L	L	L	L	H	

ここで、派生の途中であるが、この派生では、語末の音節のみが重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #) のためProject:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントを付与するためにEdge:LLLが適用される。次にICC:Lが適用されたのでは、正しいアクセントが生成されないので、次のような新しいICC:Lを設けることにする。(その3へ続く)

注：

8 medúlla/medúllar は発音の違いがないので省略した。Web³ 参照。

